

Title	ゲーテ『ドイツ避難民歓談集』における社交
Sub Title	Geselligkeit in Goethes Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten
Author	岩崎, 佑太(Iwasaki, Yūta)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.116, (2019. 6) ,p.198 (67)- 214 (51)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0198">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0198</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ゲーテ『ドイツ避難民歓談集』における社交

岩崎 佑太

## 1. 『ドイツ避難民歓談集』——ゲーテの「とるにたらない作品」?

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ (1749-1832) の『ドイツ避難民歓談集』(1795年。以下『歓談集』)は、フランス革命戦争の脅威から逃れてきたある貴族の一家を主役として、彼らが物語を披露しあいながら会話を楽しむ姿を描いている。『千一夜物語』(9世紀頃)や『デカメロン』(1353)に代表される枠物語の形式をとったこの作品は、雑誌「ホーレン」(1795-1797)に連載された。「ホーレン」とは、ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー(1744-1803)やハインリヒ・マイヤー(1760-1832)、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(1767-1835)といった、当時一流の文筆家たちの寄稿を募ってフリードリヒ・シラー(1759-1805)が創刊した月刊文芸雑誌である。1794年6月13日付けの書簡でシラーが雑誌への参加を打診すると、ゲーテは6月24日の返信において、その依頼をよろこんで受け入れる。「ホーレン」への寄稿は、「私のなかでつかえた状態になっていた幾多のものに、きっとまた生き生きとした歩みを与えてくれるでしょう」(8.1-12)。10月28日の書簡から明らかのように、哲学的考察ばかりで「詩的文章(poetische Aufsätze)」(8.1-36)に欠けるかもしれない雑誌にゲーテの文学作品を載せることを、編集者のシラーは望んでいた。イェーナでの二人の会合を経て、11月上旬頃には枠物語としての『歓談集』のコンセプトが固まったと考えられる。<sup>1</sup>1795年1月「ホーレン」創刊号からはじまった連載は、途中休止を挿みつつ計6回、10ヶ月の期間におよんだ。貴族の一家がはじめて物語を披露しようのは「ホーレン」第2号であり、四つの怪奇物語が彼らの会話の中心となる。次

に第4号でひとつ目の道德物語が家族の団欒の場で披露されると、第7号では二つ目の道德物語、第9号ではその後日譚が語られる。最後の第10号には『歓談集』というタイトルなしに「メルヘン」と題された物語が掲載されたが、作中の記述から、これも登場人物が披露したものと判断できる。『歓談集』の連載と平行してゲーテは他の作品も「ホーレン」に寄稿しており、第1号と第2号には詩『第1エピステル』および『第2エピステル』が、第5号と第6号には評論『文学のサンキュロット主義』と詩『悲歌』とがそれぞれ掲載された。

『歓談集』は、かつてハンプルク版ゲーテ全集の編者エーリッヒ・トゥルンツによってゲーテの創作のなかで「とるにたらない作品 (ein Nebenwerk)」<sup>2</sup>と評された。同時期に執筆されていた『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1795/96年。以下『修業時代』)<sup>3</sup>の影に隠れがちであるという事情も相俟って、この作品が論じられる機会は他のゲーテの小説に比べて多くない。先行研究は、シラーに対するゲーテの態度を論じるもの、フランス革命と関連づけるもの、「メルヘン」の不思議な筋を解釈するもの、そしてノヴェレを中心とした作品の語りや構造を分析するもの、の四つのタイプにまとめられるだろう。もっとも多い第1のタイプは、『歓談集』と平行して「ホーレン」の第1、第2、第6号に計3回発表されたシラーの美学論文『人間の美的教育に関する書簡』(1795年。以下『美的教育』)を考察し、両者の呼応関係を読み取ろうとする。ベルント・ブロイティガムが『歓談集』における美的教育思想の挫折を、ウルリヒ・ガイアーがシラーに対するゲーテの反論をそれぞれ説くのに対し、<sup>4</sup>ハルトムート・ラインハルトとマリウス・トゥルツァーは両者の共鳴を主張し、<sup>5</sup>またローター・ブルームは、賛意と批判の両方を含んだゲーテの立場を指摘している。<sup>6</sup>『歓談集』研究の第2のタイプに属するヨアヒム・ミュラーの論文は、枠物語という形式が採用された背景としてフランス革命の影響を考察し、<sup>7</sup>ヘルムート・ブランドの論考では、イタリア旅行で抱いた理想とフランス革命の現実との乖離に直面した時期のゲーテ作品として『歓談集』が扱われる。<sup>8</sup>「メルヘン」を解釈する先行研究の第3のタイプは、純粋な想像力を賛美するフーゴ・フォン・ホフマンスタール(1874-1929)の批評<sup>9</sup>から、シラーへの応答を見るベルント・ヴィッテの論考<sup>10</sup>まで実に多岐にわたり、<sup>11</sup>『歓談集』研究史のなかでもなかば独立した領域として特異な位置を占めている。最後の第4の研究タイプには、ルートヴィヒ・ティーク(1773-1853)やベルトルト・ブレヒト(1898-1956)の作品を視

野に『歓談集』の語りを分析するヴルフ・ゼーゲブレヒトの論文<sup>12</sup>や作中の幽霊譚に着目して『歓談集』の幻想物語的性格を解き明かすユルゲン・ゼーリングの分析、<sup>13</sup>さらに18世紀後半の文学に見られる語りの変化のなかに『歓談集』の物語を位置づけるギュンター・ダーマンの研究<sup>14</sup>が挙げられるだろう。1800年前後の枠物語を広く見渡し、枠内物語にばかり目を向けていた従来の研究を批判するアンドレアス・ベックは、枠と枠内との相互影響関係を重視する立場から『歓談集』を考察している。<sup>15</sup>

ラインハルトやゼーゲブレヒト、ベックの研究タイトルが示すように、<sup>16</sup>物語を披露し会話を楽しむ主人公たちの「社交 (Geselligkeit)」は『歓談集』の主要テーマのひとつとして扱われてきた。一方で、フランス革命の影響やシラーへの応答を看取するにせよ、その作品構造や語りが文学史上にもつ価値を検討するにせよ、『歓談集』がゲーテ唯一の雑誌連載の物語として彼の全作品のなかでも特別な位置を占めている点は十分に論じられてこなかった。<sup>17</sup>本稿の目的は、これまで光を当てられてこなかった発表形式の側面に目を向けることで、『歓談集』における社交を新たな視角から考察する点にある。第2章ではまず議論の前提として、家族を支える男爵夫人と物語を披露する司祭との社交の考え方に焦点をあて、主人公一家がどのように社交を楽しむことになるのかを確認しよう。その上で本題となる第3章では、『歓談集』の連載形式を通して、ゲーテが登場人物たちの社交に読者をいかにして関わらせようとしたのかを明らかにする。最後に、『歓談集』がゲーテのただひとつの連載物語となった理由について一考し、論を締めくくりたい。

## 2. 社交をめぐる議論——男爵夫人と司祭

『歓談集』の主役は、C男爵夫人と呼ばれる寡婦を長として、娘のルイーゼと息子のフリードリヒ、従兄弟のカール、そして家庭教師と老司祭から成る貴族の一家である。作品の冒頭で、家族とともにみずからの所有地に避難してきた男爵夫人は旧友たちと再会を果たすものの、フランス軍に占領されたマインツをドイツがまさに奪回しようとするいま、政治のニュースは日々飛び込んでくる。フランス革命のことに話題がおよぶと、保守派のS枢密顧問官と自由の理念に共感を抱くカール<sup>18</sup>とが激しく対立し、結局顧問官は一家の前から姿を消してしまう。

政治的主張が過激化しやすいこのような時代背景を確認した上で、以下では一家の社交の場において男爵夫人と司祭が果たす役割を検討しよう。

顧問官とカールの喧嘩別れの後、男爵夫人は人間が集う場においてあるべき振る舞いの仕方を人々に説く。

しかしみなさん、社交の場 (Gesellschaft) では、忘れないようにしてください。私たちが以前からすでに、[……] 社交的 (gesellig) であるために自分の特性をどれほど犠牲にしなけりばならなかつたのかを、また世間というものが今後もあるかぎり、各人が社交的 (gesellig) であるためには少なくとも外面的におのれを律しなけりばならないであろうことを。(4.1-448)

各人の「犠牲」、すなわち相手が不快に感じる話題には触れないようにする態度が、男爵夫人の求める「あらゆる社交的教養 (jede gesellige Bildung)」(Ebd.) の重要な一部である。革命戦争の動乱を伝える「大砲のとどろき」(4.1-441) と「大量に流れ込んでくる日々の政治ニュース」(Ebd.) とによって失われかけている「ごくありきたりな礼儀作法 (die gemeinste Höflichkeit)」(4.1-448) としての社交を重視する彼女は、このセリフの後、日々刻々と移り変わる政治の話題の排除を呼びかけ、「うつくしくかわいらしい詩」(4.1-450) や「自由闊達な哲学的考察」(Ebd.) によって会話をかわした昔のよろこびを、人々にもう一度思い起こさせようとする。<sup>19</sup> 対立が表面化しやすい状況でも、その現実を忘れるように触れ合いを楽しむことが彼女の理想の社交である。

着目すべきは、男爵夫人によって社交のルールが取り決められた後、それまでは一家の社交の中心にいなかった司祭の存在がクローズアップされる点である。ひとり席を外していた司祭が戻ってくると、男爵夫人は彼にみずからの定めた指針を伝える。取り決めのないで話題がなくなつてしまつたとルイーゼが不満をもらすなか、司祭はひそかに集めてきた物語の披露によって一家を楽しませることに自信をのぞかせる。そして彼は、社交の場において「新しさ (die Neuheit)」(4.1-452) がもつ価値を次のように語る。「[……] なにか新しいこと、とりわけ、仲間の男性、あるいは女性を貶めるなにかが話されるときほどに、集まつた人々が注意深くなり、その心の働きが生き生きとすることはめつたにありません」(Ebd.)。先に見たように、政情不安の状況のために、他者への思いやりが失

われかけていると男爵夫人は嘆いた。一方で司祭は、社交の場では時代の危機と関係なく「新しさ」が大きな影響力をもつため、次々と生まれる新たな噂や日々のニュースが話題になりやすいことを冷静に把握している。

しかし司祭自身は、「新しさの刺激」(4.1-453)に価値をおかず、一家に内緒で集めてきたという「多くの個人的な物語」(Ebd.)によって、みずからの理想の社交を目指そうとする。彼は次のように述べる。

[……] しかしこれだけは申し上げずにはいられませんが、社交の場に依存しているわれわれは、それにならい、従わなければなりません。それどころか、社交の場で厄介を引き起こすくらいなら、むしろ非社会的といわれるようなことをするほうが許されるでしょう。そして世の中で、社交の場にとってこの上なく厄介なのは、熟考し、考察するよう要求されるときなのです。熟考や考察を目指すことはすべて避けねばなりません。ですから、どんな公の会合 (jede öffentliche Versammlung) でも禁止されていることは、こっそりとひとりでやりとげなければならないのかもしれないかもしれませんね。(4.1-452)

いままでは噂話や政治ニュースが家族の社交の場の中心にあったため、「自分自身のことに取り組んでこられたすべての人間」(Ebd.)のひとりであると自負する司祭は、みずからの物語が役に立つ余地はないと考えてきた。しかし男爵夫人による政治の話題の排除は、一家が内省し、司祭の思い描く社交が実現する契機となる。家族の政治談議や噂話に加わらなかったみずからの姿勢が「非社会的といわれるようなこと」であると認めながらも、司祭は「新しさの刺激」にばかりとらわれてきた社交の場を皮肉り、「熟考」と「考察」をうながす新しい形の社交に一家の目を向けさせるのだ。男女の仲の「さまざま感情」(4.1-454)をテーマにしているという「多くの個人的な物語」を聞きながら、家族はときにみずからの経験を重ね合わせて自己省察し、仲間に意見を求めるだろう。お互いの「熟考」と「考察」を語り合うこと、自由なコミュニケーションとしての社交を司祭は期待するのである。社交の場に「ならい、従わなければなりません」とも語る彼は、好き勝手に振る舞うカールやルイーゼではなく、社交についてたしかな考えをもつ男爵夫人の立場を尊重し、共感を抱く一方で、「礼儀作法」に基づく社交とは明らかに一線を画している。

司祭と男爵夫人の考え方の相違は、『歓談集』成立時のドイツ社会の変化のなかで、新旧の社交形態が混在していた状況を反映しているように思われる。18世紀後半、学者や聖職者、実業家、法律家といった新興市民層が台頭したドイツでは、儀礼を重んじる貴族の宮廷的社交に代わり、階級間を越えた自由な交流がますます求められるようになっていった。フリーメーソンや自然科学協会、読書会 (Lesegesellschaft) といった大小さまざまな場での交流が生まれた当時の状況を詳細に論じたウルリヒ・イム・ホーフは、「18世紀の社会 (Gesellschaft) がその時代のいくつもの社交の場 (Gesellschaften) との相互影響関係にあること」<sup>20</sup>を強調する。社交をめぐる議論は、後期啓蒙および初期ロマン派の作家たちのあいだでも盛り上がりを見せた。アドルフ・クニッゲ (1752-96) の『人間交際術 (Über den Umgang mit Menschen)』(1788) や、クリスティアン・ガルヴェ (1742-1798) の『社交の場と孤独について (Über Gesellschaft und Einsamkeit)』(1797)、イマヌエル・カント (1724-1804) の『実用的見地における人間学 (Anthropologie in pragmatischer Hinsicht)』(1798)、さらにフリードリヒ・シュライアマハー (1768-1834) の『社交的振る舞いに関する試論 (Versuch einer Theorie des geselligen Betragens)』(1799) といった著作は、タイトルからもうかがえるように、画一的コミュニケーションが難しくなった時代において、人間、とりわけその社交をめぐる問いが切実さを帯びていたことを物語っている。<sup>21</sup> シラーの『美的教育』と並んでゲーテの『歓談集』は、このような時代状況を背景に成立した作品である。<sup>22</sup>

『歓談集』の執筆時期、ゲーテはヴァイマルの宮廷で王侯や貴族、領主からなる「金曜日の集い」と呼ばれる社交を催し、芸術・学問談義を楽しんでいた。たしかに、ベルリンなどの都市部に比べて身分秩序の壁が厚いヴァイマルにおいて宮廷顧問官として働いていたゲーテは、貴族社会の社交に少なからぬ愛着を抱いていたかもしれない。しかし「金曜日の集い」が社交上の儀礼を嫌っただけでなく、学者の参加を歓迎し、また自然哲学の影響を受けた相互作用の社交をコンセプトにしていたという事実<sup>23</sup>からは、市民社会の社交の波がゲーテのもとにも押し寄せていたことがうかがえる。そればかりか、小説家ゲーテは新しい時代の社交に大きな価値を見出していた。『歓談集』の家族は男爵夫人の要求するエチケットではなく、司祭の物語によって社交を楽しむ。物語を聞いた一家は「熟考」と「考察」を他者と共有し、自己省察しながら、貴族的「礼儀作法」に束縛

されない社交へと導かれてゆくのである。

### 3. 雑誌連載の物語——読者との社交

次に、『歓談集』が全6回の雑誌連載のなかでどのように配分され、発表されたのかを確認してみよう。収集した物語の性格について司祭がみずから語る場面はすでに見たとおりだが、『歓談集』の第1回連載分は、その実際の披露の前に男爵夫人、ルイーゼ、司祭がかわす次のような言葉をもって終わっている。

男爵夫人「まあそれでは、明日まで辛抱しなければならないのですね。」

ルイーゼ「なにを話していただけるのか、とっても気になります。」

老人「そんなに楽しみにされては困ります、お嬢さん。高まった期待というのはめったに満たされないものですから。」(4.1-456)

物語の聞き手である男爵夫人とルイーゼの立場は、『歓談集』の読者と重ね合わせられる。実際の披露が持ち越されることで、読者は彼女たちと同じように次号の「ホーレン」刊行を心待ちにするだろう。ゲーテは連載形式を巧みに利用して、登場人物たちの社交に読者を誘うのだ。このような試みは、以降も続けられる。第2回連載では、男爵夫人が不在のなか、最初に司祭が歌姫アントネッリの物語を披露し、ルイーゼ、カール、フリードリヒたちが感想を述べあう。すると司祭に触発されたフリードリヒが次の幽霊譚の話し手となり、最後にはカールが將軍バッソルピエールに関する物語を二つ披露する。これら四つの怪奇物語と各々に対する聞き手のリアクションとが同一回のなかで描かれることで、物語を介して一家の歓談が活発になってゆく様子がまず読者に提示される。しかし以降の連載では二度にわたり、物語とそれに対する一家の反応とが分断される。第3号での休載の後、「ホーレン」第4号で司祭が披露したのは弁護士の道徳物語であったが、貴族の一家がそれをどのように受容するかは、第5号と第6号において、第7号の男爵夫人のセリフ「お話の弁護士のことは賞賛しなければなりませんね」(4.1-494)まで待たなければならない。その第7号では、弁護士の物語についての感想が冒頭で語られた後、フェルディナントの道徳物語が新たに披露される。一家の反応は、第8号での休載を経て、「ホーレン」第9号冒頭のルイーゼ



のセリフ「このお話は気に入りました」(4.1-513)からはじまる会話によってようやく明らかになる。第9号ではそのルーゼの言葉の後、フェルディナントをめぐる短い後日譚を司祭が語り、男爵夫人が感想を述べるが、これは怪奇物語の披露と聞き手の反応とが同時に描かれた「ホーレン」第2号の形に回帰しているといえるだろう。そして最後にカールが、想像力に満ちた物語を聞きたいと司祭に熱望し、第10号の「メルヘン」へとつながってゆく。物語に対する登場人物たちの感想が二度持ち越されるだけでなく、合間に休載が四度あることは、作品の展開に対する読者の興味を高めるための小説家ゲーテの戦略であったに違いない。<sup>24</sup> 読者は数号先の「ホーレン」刊行まで、自分たちが気に入った物語の箇所や解釈の可能性、あるいは一家の人間たちがくだす評価について、雑誌を読んだ者同士で予想し、意見交換するだろう。司祭が男爵夫人一家に求める社交のなかでの「熟考」と「考察」は、同時に読者への課題ともなるのだ。

さらにここで着目すべきは、幽霊譚からはじまった作中物語が、道徳物語を経て最後に「メルヘン」にいたる「詩的上昇のプログラム」<sup>25</sup>である。娯楽要素の強い物語から、人物造詣がより複雑でシリアスな物語へと連載を読み進めながら、最終的に読者は想像力の横溢する「メルヘン」に到達する。しかも最初の幽霊譚に興奮した一家の口数は、作品の後半ほど少なくなってゆく。フェルディナントの後日譚には男爵夫人が短いコメントをするだけであり、「メルヘン」に関する家族の感想は一切描かれぬ。登場人物が多くを語るようになってゆく代わりに、読者が『歓談集』を読む仲間と積極的に語り合うことを、ゲーテは期待しているかのようだ。<sup>26</sup> 連載を通して作中の社交に参加してきた読者は、幽霊譚や道徳物語よりも多義的な「メルヘン」をめぐるいっそうの「熟考」と「考察」を求められるばかりでなく、それを人と話し合うことで、自分たち読者同士の社交を楽しむようながされるのである。

もっとも、1795年5月8日にクリスティアン・ゴットフリート・ケルナー(1756-1831)が、7月17日にフンボルトがそれぞれシラーに宛てて書いているように、<sup>27</sup> 『歓談集』に対する世間の声はおおむね厳しかった。作品への非難がゲーテのもとに実際どの程度直接届いていたかは、推測の域を出ない。直接的な批判を聞かずに済んだために、ゲーテは無邪気に執筆を続けられたのだろうか。少なくともシラー経由で、彼は読者のネガティブな反応を知らされていた。1795年5月15日付けの手紙においてシラーは次のように書く。「[……] あなたの『歓

談集』に戸惑う人も多いです。彼らが知っていることですが、なにが起きるのかまだ見通せないからです。お分かりのとおり、われらがドイツの客人たちは自制することができません。ほんとうにおいしい食事を味わおうとするときに自分たちがなにを食べているのかを常に知らなければ、彼らは気がすまないのです」(8.1-77)。5月の段階ではすでに最初の四つの怪奇物語が発表されていたが、シラーによれば、ゲーテが全体としてどのような作品を作り上げようとしているのか、多くの読者は不安に感じているという。しかしこのように厳しい意見が出されても、ゲーテは連載を諦めなかった。それどころか、執筆のあいだゲーテが『歓談集』の読者の存在に気を配り、彼らの関心を引くためにいかに腐心していたのかは、「メルヘン」の掲載をめぐるシラーとのやりとりからもうかがえる。1795年9月3日の手紙でゲーテは「メルヘンは分割掲載を望みます。なぜならこのような作品においては、好奇心を掻き立てることが一番の狙いだからです」(8.1-105)とシラーに提案する。9月9日にシラーは「しかし私としては分割掲載に賛成いたしかねます」(8.1-106)と返事をし、結局メルヘンは一括掲載されるが、『歓談集』執筆の最終段階でもゲーテが読者による積極的な作品解釈を期待していたことは明らかだろう。1796年にヨーハン・フリードリヒ・ライヒャルト(1752-1814)の「ホーレン」批評のなかで手厳しく批判された後も、ゲーテ自身は『歓談集』の出来栄えに自信をもっていたようだ。実際には実現しなかったものの、1798年2月3日のシラー宛て書簡のなかで、彼は『歓談集』続編の構想を明かしている(Vgl. 8.1-515)。

執筆の初期から不評でありながらも最後まで連載を続け、読者に「熟考」と「考察」を求め続けたゲーテの態度はどのように説明できるのだろうか。『歓談集』の作中に、その理由を示唆する箇所がある。道徳物語が披露された後に、道徳の定義をめぐるリーゼと司祭が言い合いになる場面で、二人は最後に次のようなやりとりをする。

リーゼ「あなたがもっときちんとおっしゃっていただければ、諍いにならないで済んでいたでしょうに。」

司祭「でもそれでは話し合いにはならなかったでしょう。混乱と誤解が、活動的な生活の、そして歓談の源(die Quellen des tätigen Lebens und der Unterhaltung)なのです。」(4.1-496)

胸に抱いている「熟考」と「考察」を相手に打ち明けても必ずしも自分の望んだとおりに理解されるとはかぎらないが、一方でそれを恐れているとは自由な交流はできない。むしろ「混乱と誤解」を、活発なコミュニケーション、「活動的な生活」に必然の要素ととらえるべきであると司祭は語る。「礼儀作法」や「社交的教養」を尊ぶ男爵夫人だけではたどり着けないこのような他者との関わり方は、小説家ゲーテの読者との向き合い方でもあった。シラーが手紙で報告した、作品全体がどのようになるか分からないと非難する読者の存在も、彼にはさしてネガティブな意味をもっていなかったに違いない。連載の内容にときに困惑し批判しながらも読者同士が意見交換をすること、そのような社交的「熟考」と「考察」を通して『歓談集』が彼らの「歓談の源」になることを、ゲーテは望んでいたのである。

## 結論——『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』への展望

『歓談集』では、政情不安を背景に社交を楽しむ貴族の一家の姿を追いかけてながら、読者がみずからの「熟考」と「考察」をもって登場人物たちの輪に加わるようながされる。連載形式を巧みに利用することでゲーテが「混乱と誤解」も含めた読者との社交を楽しもうとした物語、それが『歓談集』である。ひとつのまとまった作品として読まれる今日、ゲーテ本来の意図が実現されることはないものの、連載物語としてのおもしろさは『歓談集』の重要な側面であるといえる。

では、なぜこの作品は、ゲーテの最初にして最後の連載物語となってしまったのか。「ホーレン」の編集作業でシラーとのやり取りに辟易し、雑誌連載から距離をおいたのだろうか。なるほど、雑誌作りに対するゲーテとシラーの気持ちにはそもそも温度差があったと見てよい。1790年代のシラーは経済的に困窮していた。「ホーレン」の創刊は、先行するクリストフ・マルティン・ヴィーラント(1733-1813)の雑誌「ドイツ・メルクーア」(1773-1789)を越える当代一の文芸雑誌を目指す作家の気概だけでなく、著作権の制度が存在しない当時のドイツにあって、自作を発表し、安定した収入を得るための手段という意味合いも含んでいた。<sup>28</sup> 宮廷で職を得ていたゲーテは、発行者であるシラーほど雑誌の売れ行

きに神経を配っていなかっただろう。<sup>29</sup>『歓談集』執筆を通じて、自分の思い通りのタイミングで作品を一度に発表できる書籍出版のほうをより好ましく感じたのかもしれない。

しかし、ゲーテ晩年の小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（1821/29年。以下『遍歴時代』）を視野に入れることで、『歓談集』の執筆によって彼の得たものがより明瞭に見えてくる。実際二作品の関係を考察する研究は若干数存在するものの、その多くは「諦念（Entsagung）」のコンセプトか枠構造に焦点をあてている。<sup>30</sup>しかし、ゲーテにおいて編集という行為のもつ意味に目を向けるとき、両作品はより深く結びつく。『遍歴時代』には編者と名乗る存在がたびたび登場し、読者への語りかけやノヴェレの挿入によって小説の流れを遮断する。編集作業は、『遍歴時代』の内部に取り込まれているのだ。作品に内面化されたとき、ゲーテにとって編集はもはや90年代に行っていた雑誌作りの意味を離れ、詩学的価値を獲得したのではないだろうか。そしてその編集作業が小説家としての自分にもつ価値の大きさをゲーテがはじめて感じた作品こそ、『歓談集』であつたに違いない。「ホーレン」創刊号の刊行直前、1795年1月3日に彼はシラーに宛てて次のように書く。「同じ考えをもった人たちが手を取り合わなければ、社交の場（die Gesellschaft）や社交（die Geselligkeit）といったものがいったいにならなくなるのでしょうか。影響と信頼が私たちのあいだで絶えず大きくなってゆくことを楽しみにしています」（8.1-54）。「同じ考えをもった人たちが協力しあう編集作業は、彼にとって「社交」のよろこびでもあつた。実際、多くの寄稿者がいる「ホーレン」の編集では、ゲーテの原稿が常に最優先されるわけではない。「メルヘン」の分割掲載をめぐるシラーと意見が食い違ったことは先に見たが、当初ゲーテは「ホーレン」第9号に載せるつもりでその執筆を急いでいた。しかし、すでにみずからの論文を9号用に出版社に送付していたシラーは、「メルヘン」を第10号にまわすことを決める。他の執筆者の遅れやその号の原稿のバランスといった要素で、掲載のタイミングは変わってしまう。作家にとって一見不自由にも思われるこの点こそ、ゲーテが雑誌連載をめぐる編集作業を「社交」と呼んだ理由だろう。『歓談集』の社交の場でときに意見の対立が生まれても、それを司祭が「活動的な生活の、そして歓談の源」といったように、社交としてのゲーテの編集作業において「混乱と誤解」は否定的な意味を与えられていない。それどころかゲーテは、シラーとの衝突や予期せぬ原稿掲載の見送り

も、ひとりで執筆しているだけでは得られない経験として楽しんでいた。そして『欲談集』から20年以上後に書かれた『遍歴時代』では、読み手の「混乱と誤解」をいっそう誘発する複雑な語りとともに、ゲーテと読者との社交は続けられることになる。

「ホーレン」の編集作業と『遍歴時代』を結ぶ糸は、もう一本ある。雑誌創刊前、ゲーテは作品の匿名発表にこだわっていた。作者名を伏せることを1794年12月6日と10日の書簡で彼が求めると（Vgl. 8.1-45f. und 48）、その要求をシラーが呑み、結局「ホーレン」ではゲーテ自身の作品はもちろん、他のすべての寄稿も匿名で発表されることになった。ガイヤーが述べるように、みずからの名前を隠したほうが気兼ねなく執筆できるとゲーテは考えたのかもしれないが、<sup>31</sup> 執拗ともいえるこだわりには別の理由を探ってみたくなる。実際に匿名の作品が並ぶ「ホーレン」を手にした読者には、どれがどの作家の手になるものか判然とせず、雑誌全体が物語や詩、評論といった異なる形式の作品の集合体を感じられただろう。それはまさに、編者の独白やノヴェレ、箴言など多様なタイプの文章から成る『遍歴時代』の構造に通じるものである。そしてそのような『遍歴時代』の「集合的」<sup>32</sup> 作品構造は、「社会的」という言葉によっても捉えなおすことができる。『遍歴時代』執筆にあたってゲーテは、翻訳された外国語の物語を作中のノヴェレとして利用し、また友人のマイヤーから与えられた紡績の知識を活用した。小説の末尾に唐突におかれた詩はシラーに関するものといわれるが、<sup>33</sup> ゲーテの脳裏には亡き友との交流の思い出があったに違いない。作中に印象的な言葉がある。離れて暮らすマカーリエと甥、ふたりの姪による多方向の書簡が挿入された後、ヴィルヘルムは彼らのやり取りについて、妻に宛てて次のように書く。「人間というのは社会的で、話し好きなもの（ein geselliges, gesprächiges Wesen）だね。[……] 書くということは普通ひとり孤独にやらなければならない仕事だけど、そうでない場合にはね」（17-310）。この言葉は、『遍歴時代』を執筆するゲーテ自身の思いでもあったはずだ。作家が「普通ひとり孤独にやらなければならない仕事」を、ゲーテは他者と社交するようにして成し遂げたのである。その背後に「ホーレン」の編集作業、ひいては、読者もまじえた社交という『欲談集』のテーマがあったことは疑いをえないだろう。<sup>34</sup> 『欲談集』は、かつていわれたようなゲーテの「とるに足らない作品」ではない。小説家ゲーテの最初で最後の連載物語であるこの作品は、『遍歴時代』にやがて結実する社交としての編

集が1790年代半ばの彼にすでに大きな意味をもちはじめていたことを、他のいかなるゲーテ作品よりも雄弁に物語っているのである。

\* 本論は、慶應義塾博士課程学生研究支援プログラムの助成による研究成果の一部である。

## 註

テキスト：Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Hrsg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u. a. München 1985-1998. 括弧内に該当巻数、頁数を記す。その他、必要に応じて以下のゲーテ全集を使用する際には、略号とともに、巻数と頁数を示す。

Johann Wolfgang Goethe: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bdn. Hrsg. von Erich Trunz. Neubearb. Auflage. München 1982. [=HA]

Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. 40 Bde. Hrsg. von Hendrik Birus u. a. Frankfurt am Main 1987-2013. [=FA]

- 1 Vgl. Kommentar von Reiner Wild (4.1-1041).
- 2 Kommentar von Erich Trunz (HA Bd. 6, S. 611).
- 3 平行して執筆された『修業時代』と『歓談集』には共通するテーマも多く見出せるはずだが、二作品があわせて論じられることは決して多くない。その貴重な研究のひとつとして、近代における職業の性別分化の文脈で両作品を論じた次の論考が挙げられる。Franziska Schössler: Rationale Lebensführung und bürgerliches Geschlechterprogramm. Zu Goethes „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ und dem Novellenzyklus „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“. In: Goethe und die Arbeit. Hrsg. von Miriam Albracht u. a. Paderborn 2018, S. 121-146.
- 4 Bernd Bräutigam: Die ästhetische Erziehung der deutschen Ausgewanderten. In: Zeitschrift für Deutsche Philologie. Bd. 96, Heft 4 (1977), S. 508-539; Ulrich Gaier: Soziale Bildung gegen ästhetische Erziehung. Goethes Rahmen der „Unterhaltungen“ als satirische Antithese zu Schillers „Ästhetischen Briefen“ I-IX. In: Poetische Autonomie? Zur Wechselwirkung von Dichtung und Philosophie in der Epoche Goethes und Hölderlins. Hrsg. von Helmut Bachmaier u. a. Stuttgart 1987, S. 207-272.
- 5 Hartmut Reinhardt: Ästhetische Geselligkeit. Goethes literarischer Dialog mit Schiller in den „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“. In: Prägnanter Moment. Studien

- zur deutschen Literatur der Aufklärung und Klassik. Fs. Hans-Jürgen Schings. Hrsg. von Peter-André Alt u. a. Würzburg 2002, S. 311-341; Marius Tölzer: »Wissen sie nicht [...] uns irgend ein Märchen zu erzählen?« Betrachtungen zur Struktur von Goethes „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“ hinsichtlich Schillers Briefen „Über die ästhetische Erziehung des Menschen“. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. Jahrgang 92, Heft 1 (2018), S. 15-30.
- 6 Lotar Bluhm: „In jenen unglücklichen Tagen ...“. Goethes „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“ oder: Die Ambivalenz von Kunst und Gesellschaft. In: Erzählte Welt – Welt des Erzählens. Fs. Dietrich Weber. In Verbindung mit Elisabeth Stein u. a. Hrsg. von Rüdiger Zymner. Köln 2000, S. 27-45, hier S. 44.
- 7 Joachim Müller: Zur Entstehung der deutschen Novelle. Die Rahmenhandlung in Goethes „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“ und die Thematik der französischen Revolution. In: Gestaltungsgeschichte und Gesellschaftsgeschichte. Literatur-, kunst- und musikwissenschaftliche Studien. Fs. Fritz Martini zum 60. Geburtstag. In Zusammenarbeit mit Käte Hamburger. Hrsg. von Helmut Kreuzer. Stuttgart 1969, S. 152-175.
- 8 Helmut Brandt: Entsagung und französische Revolution. Goethes Prokurator- und Ferdinand-Novelle in weiterführender Betrachtung. In: Deutsche Klassik und Revolution. Texte eines literaturwissenschaftlichen Kolloquiums. Hrsg. von Paolo Chiarini u. a. Roma 1981, S. 195-227.
- 9 Hugo von Hofmannsthal: Gespräch über die Novelle von Goethe. In: Ders.: Sämtliche Werke. Kritische Ausgabe. Bd. 31. Hrsg. von Ellen Ritter. Frankfurt am Main 1991, S. 146-150, hier S. 146f.
- 10 Bernd Witte: Das Opfer der Schlange. Zur Auseinandersetzung Goethes mit Schiller in den „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“ und im „Märchen“. In: Unser Commercium. Goethes und Schillers Literaturpolitik. Hrsg. von Wilfried Barner u. a. Stuttgart 1984, S. 461-484.
- 11 他に「メルヘン」に関する主な先行研究は以下のとおり。Gonthier-Louis Fink: „Das Märchen“. Goethes Auseinandersetzung mit seiner Zeit. In: Goethe. Neue Folge des Jahrbuchs der Goethe-Gesellschaft. 33 (1971), S. 96-122; Peter Pfaff: Das „Horen-Märchen“. Eine Replik Goethes auf Schillers „Briefe über die ästhetische Erziehung“. In: Geist und Zeichen. Fs. Arthur Henkel zu seinem sechzigsten Geburtstag dargebracht von Freunden und Schülern und herausgegeben von Herbert Anton u. a. Heidelberg 1977, S. 320-332; Katharina Mommsen: »Märchen des Utopien«. Goethes „Märchen“ und Schillers „Ästhetische Briefe“. In: Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. Fs. Richard Brinkmann. Hrsg. von Jürgen Brummack u. a. Tübingen 1981, S. 244-257; Paul-Wolfgang Wührl: Das deutsche Kunstmärchen. Geschichte, Botschaft und Erzählstrukturen. Heidelberg 1984, S. 62-69.
- 12 Wulf Segebrecht: Geselligkeit und Gesellschaft. Überlegungen zur Situation des Erzählens

- im geselligen Rahmen. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift. N. F. Bd. 25, Heft 3 (1975), S. 306-322.
- 13 Jürgen Söring: Die Verwirrung und das Wunderbare in Goethes „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“. In: Zeitschrift für Deutsche Philologie. Bd. 100, Heft 4 (1981), S. 544-559.
- 14 Günter Damann: Goethes „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“ als Essay über die Gattung der Prosaerzählung im 18. Jahrhundert. In: Der deutsche Roman der Spätaufklärung. Fiktion und Wirklichkeit. Hrsg. von Harro Zimmermann. Heidelberg 1990, S. 1-24.
- 15 Andreas Beck: Geselliges Erzählen in Rahmenzyklen. Goethe – Tieck – E.T.A. Hoffmann. Heidelberg 2008, S. 13-243.
- 16 注5と注12、および注15を参照。また、ギーゼラ・ヘンクマンが社交を『歓談集』の「中心的テーマ」と位置づけているほか、エマニュエル・ペーターは「1800年頃の詩的社交性の構想」という章題のもと『歓談集』に焦点をあてている。Gisela Henckmann: Gespräch und Geselligkeit in Goethes „West-östlichem Divan“. Stuttgart u. a. 1975, S. 19; Emanuel Peter: Geselligkeiten. Literatur, Gruppenbildung und kultureller Wandel im 18. Jahrhundert. Tübingen 1999, S. 289-305.
- 17 雑誌連載の物語としての『歓談集』の性格を重視した先行研究は、長谷川弘子の二つの論文がほとんど唯一といってよい。ただし長谷川の研究では、本稿が主眼とするような作品分析は行われていない。長谷川弘子「ゲーテの『ドイツ避難民閑談集』(1795)とフォン・C男爵夫人の忠告——第一次対仏同盟戦争時における月刊文芸誌連載のある枠物語——」『杏林大学研究報告——教養部門』第34巻、杏林大学、2017年、123-137頁。同著者「雑誌『ホーレン』連載物語としてのゲーテ『ドイツ避難民閑談集』——「学識のない読者」のための娯楽的な物語?——」『杏林大学外国語学部紀要』第30号、杏林大学外国語学部、2018年、39-65頁。
- 18 ラインハルトによれば、革命に共鳴するカールは、ゲーテの友人にしてジャコバン派支持者であったゲオルク・フォルスター (1754-1794) がモデルだという。Reinhardt: a. a. O., S. 325 (Anm. 55).
- 19 「ホーレン」は政治や宗教に関する一切の拒否を謳っていたため、『歓談集』冒頭の政治的対立がシラーに対するゲーテの態度の証左として論じられてきた。この点についてトルステン・ファルクは、男爵夫人による取り決めの後、登場人物だけでなく語り手も政治状況に言及しなくなることから、政治のテーマが排除されてゆく過程こそをゲーテは描きたかったと解釈する。Thorsten Valk: Ästhetische Bildung als politische Propädeutik? Goethes „Unterhaltungen“ als kritische Replik auf Schillers „Horen“-Ankündigung. In: Literaturwissenschaftliches Jahrbuch. N. F. 48 (2007), S. 189-214, hier S. 199.
- 20 Ulrich Im Hof: Das gesellige Jahrhundert. Gesellschaft und Gesellschaften im Zeitalter der Aufklärung. München 1982, S. 235.
- 21 社交に関する議論が18世紀の作家たちのあいだで隆盛する点については、次の笠



- 原賢介の研究書が簡潔にまとめているほか、中世以降の社交概念の変遷を追う詳細な記述として、デートレフ・ガウスのモノグラフィーが示唆にとむ。笠原賢介『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界——クニッゲ、レッシング、ヘルダー』未来社、2017年、29-87頁。Detlef Gaus: *Geselligkeit und Gesellige. Bildung, Bürgertum und bildungsbürgerliche Kultur um 1800*. Stuttgart u. a. 1998, S. 56-113.
- 22 『美的教育』における社交を、カントやゲーテとの関連も含めて端的に論じたものとしては、次の文献が有益である。Markus Fauser: *Das Gespräch im 18. Jahrhundert. Rhetorik und Geselligkeit in Deutschland*. Stuttgart 1991, S. 69-75.
- 23 Vgl. Peter: a. a. O., S. 246f. und S. 251. なおペーターは、男爵夫人の「社交的教養」が「金曜日の集い」の目指した人格形成の理念に重なりと説く。Ebd., S. 296. 本稿では、男爵夫人の理想とする貴族的社交に親しみをもちつつも、司祭による新しい形の社交の価値を描いた点に、時代の変化をとらえるゲーテの冷静なまなざしを看取したい。
- 24 執筆の遅れも休載の一因かもしれないが、それをめぐるシラーとのやり取りが確認できるのは1795年2月25日の書簡だけである。弁護士の道徳物語が「ホーレン」第3号に間に合わないため次号にまわしてくれるよう、ゲーテは要請している (Vgl. 8.1-64)。
- 25 Segebrecht: a. a. O., S. 311. 同様の見解はこれまでの研究でたびたび指摘されてきた。Müller: a. a. O., S. 159; Werner Keller: *Johann Wolfgang von Goethe*. In: *Handbuch der deutschen Erzählung*. Hrsg. von Karl Konrad Polheim. Düsseldorf 1981, S. 72-90, hier S. 78; Sigrid Bauschinger: „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“ (1795). In: *Goethes Erzählwerk. Interpretationen*. Hrsg. von Paul Michael Lützel u. a. Stuttgart 1985, S. 134-167, hier S. 158 und S. 163. なお、最初の四つの怪奇物語がすべてゲーテの収集ないし伝え聞いた物語であるのに対し、ひとつ目の弁護士の道徳物語が『デカメロン』の挿話の大幅な改変、次のフェルディナントの道徳物語と「メルヘン」とがゲーテの完全な創作である点にも、作中物語の質的深化は見取れる。この点に関しては次の二つの論文を参照。中村志朗「近代ドイツ・ノヴェレ (短篇) の成立——ゲーテの『ドイツ避難民の談話』を中心として——」『東北大学文学部研究年報』第21号、東北大学文学部、1971年、1-36頁 (該当箇所は5頁)。木田綾子「新たな試みとしての枠物語——ゲーテ『ドイツ避難民の談話』について——」『九州ドイツ文学』第26号、九州大学独文学会、2012年、13-25頁。個々の物語の具体的な源泉については次を参照。Kommentar von Herbert Jaumann (FAI, Bd. 9, S. 1514-1522).
- 26 ジークリート・バウシンガーは、「メルヘン」の後で一家の反応が描かれない点に読者へのゲーテの失望を読み取り、本稿とは正反対の解釈を提示する。Bauschinger: a. a. O., S. 157. バウシンガーと同様に、読者に対するゲーテの幻滅やイロニーを『歓談集』に看取する傾向が従来の研究には強い。Vgl. Bräutigam: a. a. O., S. 535; Dietrich Jöns: *Goethes „Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“*.

- Poetisch-poetologische Beobachtungen. In: Korrespondenzen. Fs. Joachim W. Storck aus Anlaß seines 75. Geburtstages. Hrsg. von Rudi Schweikert in Zusammenarbeit mit Sabine Schmidt. St. Ingbert 1999, S. 151-174, bes. S. 167ff. たしかに、イタリア旅行後にドイツ国民の芸術観の低さを嘆いていたゲーテが読者へのイロニーを『歓談集』にこめても不思議ではないが、それだけで連載を続けたとは考えにくい。本稿では、「メルヘン」の分割掲載の希望や続編の構想といった事実からうかがえる読者に対するゲーテの期待に目を向け、『歓談集』を新しい視座から分析したい。
- 27 Briefwechsel. Briefe an Schiller (25. 5. 1794-31. 10. 1795). In: Friedrich Schiller: Schillers Werke. Nationalausgabe. Bd. 35. In Verbindung mit Lieselotte Blumenthal. Hrsg. von Günter Schulz. Weimar 1964, S. 200 und S. 250.
- 28 同時代の作家たちが刊行した雑誌のなかで「ホーレン」が占めている位置については、次の文献を参照。Peter Weber: Schillers „Horen“ – ein zeitgerechtes Journal? Aspekte publizistischer Strategien im ausgehenden 18. Jahrhundert. In: Friedrich Schiller – Angebot und Diskurs. Zugänge, Dichtung, Zeitgenossenschaft. Hrsg. von Helmut Brandt. Berlin u. a. 1987, S. 451-463.
- 29 雑誌の売れ行きを気にするシラーの心情は、第3章でとりあげた1795年5月15日の書簡からうかがえる。二人のあいだの温度差は、作中の顧問官とカールの政治的対立が読者に不快にとられることを心配したシラーが1794年11月29日付けの書簡で修正を依頼したにもかかわらず（8.1-40f.）、結局ゲーテがその提案にほとんど応じなかった経緯などに認められる。
- 30 Vgl. Josef Kunz: Die deutsche Novelle zwischen Klassik und Romantik. 2., überarbeitete Auflage. Berlin 1971, S. 15-41; Jane K. Brown: Goethe's Cyclical Narratives. „Die Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten“ and „Wilhelm Meisters Wanderjahre“. Chapel Hill 1975.
- 31 Gaier: a. a. O., S. 210.
- 32 ヨーハン・フリードリヒ・ロホリッツ（1769-1842）に宛てた1829年11月23日付けの書簡のなかで、ゲーテは『遍歴時代』の「集合的起源（sein kollektiver Ursprung）」について触れている。FA II, Bd. 11, S. 200.
- 33 1826年、墓場の清掃に伴い、シラーの頭蓋骨はゲーテの家で保管されていた。ゲーテはシラーの骨に関する詩を創作し『遍歴時代』の最後においたが、ゲーテの死後、その詩は長らく小説から切り離され、別個の作品として扱われていた。
- 34 なお「ホーレン」廃刊の後しばらくして、ゲーテは自身の創刊した芸術雑誌「プロピュレーエン」（1798-1800）に書簡体の物語『収集家とその友人たち』（1799）を発表する。『歓談集』の4年後に執筆されたこの作品にも『遍歴時代』の「集合的」作品構造につながるゲーテの問題意識が見られることについては、拙稿「ゲーテにおける収集の詩学——『収集家とその友人たち』をめぐって——」『研究年報』第35号、慶應義塾大学独文学研究室、2018年、21-39頁。